

勝林寺報

釈迦如来楞伽山 楞伽の山に釈迦説けり
 為衆告命南天竺 南天竺に比丘ありて
 竜樹大士出於世 邪くじき眞実のべ
 悉能摧破有無見 安楽園に生れんと
 宣説大乘無上法 みことのまに現れし
 証歎喜地生安楽 竜樹大士は教えます
 顯示難行陸路苦 陸路のあゆみ難けれど
 信樂易行水道楽 船路の旅の易きかな

親鸞さまがおしたいなさる第一番の方は南インド(南天竺)にお出ましになった龍樹菩薩さまです。

菩薩さまは、お釈迦さまがおかれになつてから凡そ七百年(西暦一五〇年)ごろのおかたです。実は、お釈迦さまは、自分がこの世を去つてつとあと、五百年にもなると、自分の説いた教えを邪魔するものも出るであろう。また、お釈迦さまのみ教えを、自分勝手に解釈して、これが正しい仏教だこれが正統だと、仏教徒の間にも対立や争いがおこつてこよう。しかしつと、そんなとき、一人の菩薩が生れ出て、あらゆる迷信邪信をうち破つて、しかもそういう時代の人々でも、みんな救われる眞実の仏法をひろめてくれるに違いないと期待なさつたのでした。(これはお釈迦さまが今のスリランカにある楞伽山という山で説きになつたお経に出ています)

実際、龍樹菩薩さまがお生れになつた時代には、人人の考え思想(「見」といいます)は乱れてしまつていました。

たとえば、人間なんて死んでしまえばそれまでだ。生きてる間が花。楽しくゆこうぜなどという「断見」やら、反対に死んでも魂はほろびはしない。魂のしあわせを祈つて修行や祈禱にはげもうなどという「常見」。あるいは仏教のなかまの間でも、有るだとか無いだとか、それぞれ自分の立場や見解に固執して、我をかり合つたり人をおとしめたりしていたのです。(これを「有無の見」)その日その日の享樂に生きる若者。あちらこちら

らの神や仏に、ずいぶん身勝手な虫のいいおねだりをしてまわる年寄りたち。(これを「邪見」といいます)
 また、壮年たちはみな、自分の思想や立場に固執して、あるいは党派を組んで、相手をけおとすために手段をえらばない。
 まことにあさましい世の中でした。

その時代のまつたよなかに出てきてくださった龍樹さま。そして、そんな間違つた迷信をうち破り、あさましい人間の我の張り合いや対立抗争を越えた「大乘無上の法」(だれもだれもが救われる法、だれもだれもが歩める念仏の道)を明らかに説き示してくださいましたのが龍樹菩薩さまです。

だから親鸞さまはまず第一に龍樹さまをおしたいなさるのです。
 なぜかといつて、親鸞さまが生きられた時代もそのころと同じく人のくらしの混乱はしてた時代だつたからです。
 「像法・末法」のみだれた時代のなかに、しかもそういう時代に生きる私の救われる眞の仏法をお示しくださいました方(親鸞さまは菩薩さまを「像法」のときの「智人」とよんでいらつしやいます)であるから、「私をお導きくださいました方」として一番におしたいなさつたのです。

龍樹菩薩さまはこのように、間違つた思想をうち破り(破邪)、正しい仏法を顕わす(顕正)ために「中論」という本や「大智度論」などというたくさんのお本をおつくりになりました。ですから現在伝わっている正しい仏教は、みなこれら龍樹菩薩のお書物のなから出てきたといつてよいのです。菩薩さまのことを「八宗の祖師」といふのです。

けれども龍樹さまが、このような思想混乱の世のなかに翻弄されながら日々を煩惱の中にとすしている弱いなりの私の問題を考え求めてくださった本は「十住毘婆沙論」十七巻だけです。
 この歩みのたどたどしい私に、この生死の世界にありながら、もうあととざりせし如來さまにならしていただけるよろこびに安住できる道はあるのだぞと、この私の身になつてお示しくださいましたのです。(「易行品」という一章です)歎喜地を証して安楽園如来の國に生れる「私」

の道です。
 それはどんな道か。
 それは弱い愚かな私の足をあてにして うんうん苦しみながらたどるけわしい細路ではありませぬ。
 私の能力をあてに我武者羅に難行苦行する道ではありません。

その道は、苦しいばかりではなく行く先々たくさん恐ろしい落とし穴があります。
 お釈迦さまの時代から遠くはなれた今の、煩悩さかんな私にたどれる道ではありません。
 いま龍樹さまが自からその道を歩みながら「願わくは共に」歩まんとすすめてくださる道は、「願念仏」の道です。お念仏のなかに阿彌陀如来さまのご本願を憶念することです。

仏道を歩むには余りにも足なえ切つた私をこそ待ちうけてくださつた如来さまのご本願の大きな船のあつたことを知りおまかせすることとお示しくださいましたのです。
 落とし穴もない易く安らかな親のふところでお示し、「易行道」といふのです。

親鸞さまは、この龍樹菩薩の身をもつてのみ教えを次のようによるこんでいらつしやいます。
 生死の苦海ほとりなし
 ひさしくしづめるわれらおぼ
 弥陀弘誓のふねのみぞ
 のせてかならずわたしける

あのかたも逝つた。
 次はだれ。
 順番はありません。
 横に 一列に
 ならんで いるだけ。



九月のこよみ

- 八月二十九・三十日 大谷本願研修講師
- 九月一日 岡山ブロック総代研修講師
- 二日 但馬ブロック総代研修講師・小田「連研赤穂組連研講師
- 三日 成田勇夫氏納骨・出石組総代研修
- 四日 丹波ブロック総代研修講師
- 五日 阪神地区総代研修講師・兵庫教区教化企画室会議
- 六日 企画室会議
- 七日 富山教区教化推進委員研修会講師
- 八日 京都(病院)
- 九日 十六夜会・玉日会・永井淳一氏宅法事
- 十日 津井山照禪寺仏來來寺
- 十一日 本願寺会館日曜講話
- 十二日 滋賀教区栗田組寺族婦人研修講師
- 十三日 兼井巖正氏宅法事
- 十四日 秋彼岸会法要
- 十五日 宮島文夫氏宅法事
- 十六日 成田武夫氏宅忌明・みのりを聞く会
- 十七日 姫路はらす会講師
- 十八日 中央連研講師研修会
- 十九日 兵庫教区同朋運動推進委員研修会講師
- 二十日 十日の「十六夜会」(いざよい会)の会場は、今月から出石町福成寺になります。夜八時からです。
- 二十一日 同日の「玉日会」は今まで通り出石町西方寺で午後二時から。
- 二十二日 さそい合つてお参りください。

兵庫仏婦幹部研 勝林寺で

兵庫教区仏婦連盟の五十八年度「仏婦幹部研修会」を今年但馬で開催されることになりました。そしてその会場とお世話を勝林寺仏婦でひき受けることになりました。
 十月十八日十九日の二日間です。ご門徒なかなしく仏婦会員のご協力をお願いいたします。



「三帰」のこと

山田鳥石先生は但東町正法寺のご出身。既往の型を破つた前衛畫道のなかに真なるものをひたすらに追窮されつゝ、けてこられてゐる方です。すでに斯界において一門をなしておられます。勝林寺に先生会心の創作を寄贈くださいました。

「三帰」をまた「三帰依」・「帰依三宝」とも申します。つまり「三」といふのは「三宝」のこと。「帰」といふのは「帰依」のことです。

「三宝に帰依」ということは、「私は仏教徒です」という自己表明のあいさつのことばとなつてゐます。

ですからたとえば、つい先日勝林寺で催した「子ども一泊研修」のときにも、まずこの「三帰」のことばでもつて如来さまにごあいさつすることから始めるのです。

子どもたちは合掌のすがたで次のようになえます

ブツダム サラナム ガツチャイミ
ダンマン サラナン ガツチャイミ
サンガン サラナン ガツチャイミ

これはパーリー語といって、遠い昔、インドの仏教徒たちが称えていたであろうことばです。

「仏」に帰依します。

「法」に帰依します。

「僧」と「法」と「僧」は仏教の三つの宝です。どれ一つ欠いても仏教は成り立ちません。「法」とは「めざめたおかた」如来さまです。「僧」とは如来さまが指示くださった真実。

「僧」とは「和合」とも訳されます。如来さまのみ教えもとにできる人人のむつみ合ひのことです。

ですから「三帰」は「ほとけさま 私はほとけさまをおしたいたいします。そして、ほとけさまのお示しくださつた真実な道歩みます。同じ道を歩む人人のむつみを大切にいたします」という仏の子としての心の表明なのです。仏の教えに会いえたものの、こよないよろこびのうたなのです。「帰依」をあるいは「帰命」ともまた「信心歓喜」ともいふのです。



一樹の
陰に
宿るも
多生の
縁

山陰豪雨災害見舞の募金

七月末、島根・山口を襲つた台風豪雨による災害は、調査が進むにつれてその甚大さ悲惨さがあらわになつて参りました。まして勝林寺ご門徒の縁故のお宅に流失死亡もあつたと聞いてはすでに人ごとでない悲痛さをおぼえます。ご本山からの見舞よびかけを待つまでもなく勝林寺仏壇は災害見舞の募金活動を行いました。今日までに寄せられた金額は六万二千元です。ご本山を通じて現地へお届けいたします。会員ご門徒の皆様のおたかなご協力に感謝します。

葬儀

八月十六日
加古川
元門徒総代 田 勇 夫 様

それに付きそいのおかあさん、仏壇役員など十六名。子どもといつしよに研修に参加してもらいました。だんだん子どもエネルギーについていくのがしんどくなつたという任職を、おかあさんたちが「子どもだけではなく孫が来るまでがんばつてもらわねば」と励まされたりしました。参加の子どもたちから寄せられたハガキです。

「お寺からもらつて帰つたおロッソクに火をつけておじいちゃん・おばあちゃんとおかあさんと弟と私とで、うちの仏さまにおれいをしました。おぼえたうたもうたつてあげました。ゲームやねるときがおもしろかつたです。来年も行きたいと思ひます。ありがたうございました。」

「お寺へ行つた時は知らない人ばかりでした。でもだんだん名前もわかるようになり、すぐにいろいろな友だちができました。ごいんげさんにいろいろなお話を聞いたけど、いちばん心にかんじたのは「ガキ」の話でした。私はいつもおかあさんにごねてばかりいるので、もくれんさまのおかあさんと同じように、私のためにガキにおちてしまうのかと心配になりました。おかあさんをガキに行かせないように私もうごねたりしないようにしようと思ひます。私、ごいんげさん、おかあさんがガキに行かないようにいひのつてください。おねがいします。」

「ぼくは、おぼんはどうしてできたのかということを知らなかつたけど、おぼんをしてもらつたのでよくわかりました。ゲームをたくさんやつておもしろかつたです。夕食はすきなカレーだつたので二はいたべました。げんとうを見たのははじめてでした。おふろに入つてねるときもおもしろかつた。またらいねんも行きたいです。ありがたうございました。」

「子ども一泊研修会」

母子四十四人参加

「念仏にかおる家庭をきずき、仏の子どもを育てます」という仏壇綱領のねがいによつて始められた夏の「子ども一泊研修会」は、今年で十七回をかぞえました。八月十九日・二十日、集まつた子ども二十八名。

時間	内容
1:00	うらなひ つかひ つかひ つかひ
2:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
3:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
4:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
5:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
6:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
7:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
8:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
9:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
10:00	おぼん つかひ つかひ つかひ
11:00	おぼん つかひ つかひ つかひ